

卒 業 論 文

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市  
のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～

2016年1月14日提出

島田智明 研究室

学籍番号 1232605B

氏名 櫻井太貴

## 目次

1 はじめに	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の動機	1
2 スポーツに関連する国の法律および基本計画	1
2.1 スポーツに関連する国の法律の概要	1
2.2 スポーツ振興基本計画・スポーツ基本計画の概要	2
2.3 スポーツ立国戦略とその概要	3
3 スポーツに関連した地方自治体の地域活性化の事例	4
3.1 神奈川県横浜市の事例	4
3.2 カマタマーレ讃岐の事例(香川県)	5
4 研究方法	6
5 神戸市のスポーツ振興の取り組み	6
5.1 神戸アスリートタウン基本構想(健康・スポーツ都市こうべ)	7
5.2 神戸市におけるスポーツ振興成功例	10
5.3 王子プロジェクト	13
6 アメリカンフットボールから地域活性化	14
6.1 アメリカンフットボールでの地域活性化の先駆け(川崎市)	14
6.1.1 フラッグフットボールの利点	16
6.2 アメリカンフットボールの魅力	16
6.2.1 アメリカンフットボールの難しさ	17
6.3 日本でのアメフトの歴史	17
6.4 日本でのアメフト人気	17
6.5 アメリカの大学スポーツの実態	20
6.6 神戸大学アメリカンフットボール部の取り組み	20
7 神戸市の地域活性化案	21
7.1 アメリカンフットボールを通じて	21
7.2 スポーツ科学センターの設立	22
8 結論	24
9 参考資料	25

# スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析 ～アメリカンフットボールを通じて～ 神戸大学経営学部 櫻井太貴

## 1 はじめに

### 1-1 研究の背景

現在、日本は少子高齢化社会へと突入している。日本の総人口は2010年頃をピークに減少の一途をたどっている。かつて、高齢化や過疎化といえば地方や農村部の問題であったが、今や社会全体が抱える問題となっている。少子高齢化社会は経済の衰退を招き、地域の活気は徐々に失われると考える。

人口減少に歯止めをかけ、単純に人口を増やし経済力を取り戻す方法として移民を受け入れることも案としてあるだろうが、現実問題として移民問題は国家の根本の問題であり、移民大国であるフランスをはじめ欧州では、移民受け入れによるさまざまな問題が引き起こされているのが現状である。ゆえに、移民に頼る活性化は実現し難いといえる。

### 1-2 研究の動機

私自身が体育会アメリカンフットボール部に所属していることもあり、神戸市の活性化のために、スポーツの分野で街を活性化したいと考えた。そこに住む人々が子どもからお年寄りまで元気で健康に暮らし、活気ある街にすることができる提案をし、考察する。

## 2 スポーツに関連する国の法律及び基本計画

スポーツに関する国の法律としてあるのは、2011年にスポーツ基本法が制定され、それに基づきスポーツ基本計画が発表された。スポーツ基本法の前身として1961年にスポーツ振興法が制定されている。それに基づきスポーツ振興基本計画が2000年に策定されている。

### 2-1 スポーツに関連する国の法律の概要

#### 1 スポーツ振興法（1961年公布）

『昭和36年、オリンピック東京大会を3年後に控え、盛り上がる国民の世論を背景に、わが国におけるスポーツ振興に関する施策の基本を明らかにする「スポーツ振興法」が制定されました。同法は、スポーツの定義、国や地方公共団体における計画の策定、指導者の充実や施設の整備などのスポーツの振興のための措置、国の補助などを網羅的に定めており、わが国におけるスポーツ振興の基本となってきました。』

(平成22年度文部科学白書より)

#### 2 スポーツ基本法（2011年公布）

日本のスポーツ振興は1961年公布のスポーツ振興法に基づいて施策がなされてきた。

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

現在日本は少子高齢化社会に直面しており、さまざまな社会問題を抱えている。その中でスポーツ振興が果たすべき役割も大きくなってきた。しかし、スポーツ振興法では現代のスポーツや新たな課題に対応できなくなっていた。

スポーツ振興法には、ドーピング問題、競技者育成などに関する規定がない。スポーツ権の概念やスポーツ仲裁についての言及がない。プロスポーツを対象としていない。これら現在取りざたされている諸問題に対応するために2011年にスポーツ基本法が制定された。

スポーツ基本法制定されてから実に50年ぶりの全面改正となった。

そして、第33条において『国は、スポーツ団体であってその行う事業がわが国のスポーツの振興に重要な意義を有すると認められるものに対し、当該事業に関し必要な経費について、予算の範囲内において、その一部を補助することができる。』

(スポーツ基本法 第5章 国の補助等 第33条より)

とある。つまり、スポーツ団体であれば地域活性化・スポーツ振興に貢献する事業であれば国の補助を受けることができる。

『「スポーツ基本法」は、スポーツに関し、基本理念を定め、国・地方公共団体の責務やスポーツ団体などの努力などを明らかにするとともに、スポーツに関する施策の基本となる事項定め、施設を総合的・計画的に推進し、国民の心身の健全な発達、明るく豊かな国民生活の形成、活力ある社会の実現及び国際社会の調和ある発展に寄与することを目的としています。また、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことが人々の権利である」ことや「スポーツ立国戦略」で盛り込まれた考え方である地域スポーツとトップスポーツの「好循環」について盛り込まれています。さらに、プロスポーツを正面から対象とすること、ドーピングやスポーツに関する紛争処理の規定を盛り込むなど、「スポーツ振興法」には規定されていなかった内容が新たに盛り込まれています。』

(平成23年度文部科学白書より)

### 2-2 スポーツ振興基本計画・スポーツ基本計画の概要

スポーツ基本計画の策定は、スポーツ振興法第4条で促されていたものの、2000年にスポーツ振興基本計画策定されるまで実現することはなかった。

また、2012年にはスポーツ振興基本計画の内容を継承したスポーツ基本計画が策定された。

#### 1 スポーツ振興基本計画(2000年策定)

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

スポーツ振興基本計画では、実現すべき政策目標として3つ挙げられた。

- ① スポーツの振興を通じ、子供の体力の低下傾向に歯止めをかけ、上昇傾向に転ずること
- ② 生涯スポーツ社会実現のため、できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が50%となること
- ③ オリンピックにおけるメダルの獲得率が、夏季・冬季合わせて3.5パーセントとなること

この計画をもとに多様な政策が推進されてきた。

## 2 スポーツ基本計画(2012年策定)

この計画は、「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会」の創出を目指し、今後10年間の基本方針と5年間に実施する施策を示している。今後検討すべき課題は、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適正等に応じてスポーツに参画することができるスポーツ環境の整備」である。具体的な課題は7つある。

- ① 学校と地域における子どものスポーツ機会の充実
- ② 住民が主体的に参画する地域のスポーツ環境の整備
- ③ ライフステージに応じたスポーツ活動の推進
- ④ 国際競技力の向上に向けた人材育成・スポーツ環境の整備
- ⑤ オリンピックなどの国際競技大会等の招致・開催等を通じた国際交流・貢献の推進
- ⑥ ドーピング防止やスポーツ仲裁等の推進によるスポーツ界の透明性、公平・公平性の向上
- ⑦ スポーツ界における好循環の創出

(スポーツ基本計画より)

### 2-3 スポーツ立国戦略とその概要

前述のスポーツ振興基本計画、スポーツ基本計画のほかに2010年にスポーツ立国戦略が策定された。このスポーツ立国戦略は新たなスポーツ文化の確立を中心的目標に捉えている。

『文部科学省をはじめ関係者による多面的な取組を通して子供の体力の低下傾向に歯止めがかかり、成人のスポーツ実施率やオリンピックにおけるメダル獲得率が上昇する

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

など、一定の成果を得てきましたが、いずれも現時点では「スポーツ振興基本計画」の掲げる目標値には達していません。また、一方で、少子高齢化や情報化の進展に伴う様々な社会問題が顕在化し、スポーツ振興の重要性が増す中、制定から半世紀を経過した「スポーツ振興法」は、スポーツの現状や新しい課題に十分に対応しきれなくなっているのではないかと指摘も近年なされており、スポーツ振興のための新たな法律を制定する必要性がクローズアップされるようになってきました。

このため、文部科学省では、「スポーツ振興法」の見直しと新たな「スポーツ基本法」の制定を視野に入れながら、今後のスポーツの基本的な方向性を示すスポーツ立国戦略を平成22年8月26日に策定しました。』

(2010年文部科学白書より)

### 3 スポーツに関連した地方自治体の地域活性化の事例

#### 3-1 神奈川県横浜市の事例

同じ港町である横浜市はたびたび神戸市と比較される。スポーツの点でも同じである。横浜市には、プロ野球チーム「横浜DeNAベイスターズ」、プロサッカーチーム「横浜F・マリノス」、「横浜FC」の本拠地である。そして、2011年には横浜を中心に活動するプロバスケットボールチーム「横浜ビー・コルセアーズ」が誕生した。同様に、神戸市にはプロサッカーチーム「ヴィッセル神戸」の本拠地であり、プロ野球チーム「オリックス・バファローズ」のかつての本拠地であった。

横浜市体育協会が実施したスポーツ意識調査(2011年度)によると、週1回以上定期的にスポーツ・運動を実施している市民の割合は、54.5%となっており、全国平均の45.3%を上回っている。市内の大規模屋内スポーツ施設として、横浜アリーナ、横浜文化体育館及び横浜国際プールがある。横浜アリーナは高額な利用料金ながらも世界卓球大会等の大会が開催され、スポーツのみならずコンサートや展示会等でも使用されている。横浜文化体育館は100%近い稼働率となっており、横浜国際プールは冬季には体育館として使用されている。また、横浜市の各区1館のスポーツセンターを整備しており、区民大会の開催や、初心者や高齢者、育児中の専業主婦等を対象とした教室事業の開催等地域の方々が気軽にスポーツに取り組める環境がある。さらに、障害のある子ども達がスポーツを通じて、夢と希望を持って育ち、身近な地域でスポーツ活動に参加できる環境づくりを行うことを目的とした「横浜こどもスポーツ基金」も設立され

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

た。

大都市である横浜市だからこそできる大規模な地域活性化政策がみることできる。

#### 3-2 カマタマーレ讃岐の事例(香川県)

香川県には「カマタマーレ讃岐」というプロサッカーチームがある。カマタマーレ讃岐は高松市、丸亀市を中心に活動しており、香川県全県をホームタウンとしている。2013年にはJFL(実質J3)からJ2に昇格し、話題となった。

ホームスタジアムのある丸亀市では、スポーツ振興で地域活性化や新しいまちづくりを行うホームタウン活動を展開し、スポーツを身近に感じてもらう取り組みを実践している。カマタマーレ讃岐は、地域に愛される存在を目指してホームタウン活動を行い、幼稚園訪問や学校を訪問し、部活指導も行っている。

百十四経済研究所が推計したものとすると、J2初昇格となった2014年はホーム21試合のチケットやユニフォーム等関連グッズ販売のほか、県内外からのサポーターが消費した交通費や宿泊費等を合わせると、経済効果は7億4000万円とはじき出された。地元サポーターが1人増えると、チケット代以外におよそ2300円の消費拡大につながるという試算である。

紹介した両者を考察すると、スポーツ団体等が単独で事業を進めているのではなく、市・行政の協力の下で進められているのがわかる。そして、そこに住む地域住民と一緒に始めて地域活性化することができる。

スポーツを観る環境、スポーツをできる環境、スポーツ指導者、地域住民の協力、これらが揃う必要がある。現代社会においては、特に、スポーツ指導者の存在が重要になる。一昔前の指導者といえば、技術・戦術中心で、古いといわれているのがスポーツ根性、いわゆる“精神論”である。現代においては、このような指導者は時代遅れとなる。現代の指導者に求められることは、スポーツ文化を正しく伝え、教える側・教えられる側の立場を理解し、尊敬しながら指導することである。さらに、前述の技能・戦術はもちろんのこと、スポーツから礼儀や道徳的規範も指導できるスキルを求められている。そして、教えられる側が心からスポーツの楽しさや面白さを十分に享受できなければならない。

そして、スポーツを観る環境、できる環境、指導者、地域住民の協力は現在の神戸市でも十分に可能であり、今までしてきたことである。そのうえで新たな提案もあれば、ス

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

スポーツという観点から神戸市の地域活性化・発展につなげていけるはずだ。

#### 4 研究方法

今回の調査では、どのような事案が神戸市の地域活性化につながるかを目的としており、地域活性化の中でもスポーツに関する諸文献、資料、ウェブサイトを使用した。

#### 5 神戸市のスポーツ振興の取り組み

神戸市のスポーツ振興プランにおいて、スポーツ振興を

- ① 「する」スポーツ
- ② 「みる」スポーツ
- ③ 「ささえる」スポーツ

の3つに分けて、それぞれの分野毎に課題と目標を設定し、それぞれの充実を図るとともに、「する」、「みる」、「ささえる」というスポーツの3要素を一体的・総合的に推進することにより、すべての市民が日常的にスポーツ・健康づくりに取り組めるような環境づくりを目指している。

スポーツを観る環境、できる環境に関して、現在市内には、国際級・全国大会等の大規模な大会開催会場として、ユニバー記念競技場、ホームズスタジアム神戸、グリーンアリーナ神戸、中央体育館、王子スポーツセンターがある。また、地域におけるスポーツ活動の拠点として上記の体育館の他に、東灘体育館、須磨体育館、垂水体育館、西体育館、北神戸田園スポーツ公園体育館がある。さらに、水泳とスケートの拠点としてポートアイランドスポーツセンターがある。各施設を多くの市民が目的に応じて利用している。そして、市民がスポーツに親しめるイベントも体験教室等を通じて行っている。

大規模なスポーツイベントは、スポーツフェスティバル(王子スポーツセンター)、親子でスポーツ体験フェア(中央体育館)、親子で体験ウィングスポーツチャレンジパーク(ホームズスタジアム神戸)、ウィンターフェスティバル(ポートアイランドスポーツセンター)、オリンピックデーラン神戸大会(ユニバー記念競技場)がある。

各地域におけるイベントは、KOBESUMAビーチフェスティバル、たるみ健康いきいきウォーク、王子交流劇場、各体育館主催のスポーツフェスティバルが行われている。

このように神戸市のスポーツ施設は非常に充実しており、各種イベント等も数多く開催



スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

され、「する」スポーツ、「みる」スポーツに関しては非常に充実しているといえる。

5-1 神戸アスリートタウン基本構想(健康・スポーツ都市こうべ)

神戸市は1995年に起きた未曾有の大災害である、阪神・淡路大震災からの本格的な復興を目指して「神戸アスリートタウン構想」が1999年に発表され、この構想を実現する市民団体として神戸アスリートタウンクラブが様々な活動を進めてきた。ただ単に震災前の神戸を取り戻すのではなく、「神戸の個性」を活かしながら、新しい発想のもと総合的なまちづくりを行う。そして、市民が「アスリートタウンの主人公」として、スポーツあるいは健康づくり活動に、近く深く関わることができるような環境を整え、支援することを目指すものであり、その視点を「からだ」に置いている。

この「神戸の個性」とは

- ① 恵まれた自然環境
  - ② 豊かな生活文化
  - ③ スポーツ先進都市
  - ④ 神戸ならではの都市基盤・産業基盤
- のことである。

① 恵まれた自然環境

神戸は、南には瀬戸内海、北には六甲山系があり、さまざまな自然環境をあわせもっており、日本中を探しても市民が身近に自然環境を感じることができる大都市は神戸以外に存在しないといえる。

六甲山系では、登山や人工スキーなどを楽しみながら、自然と緑の魅力を市民が身近に満喫することができる。さらに、六甲山系から湧き出る有馬の湯は、日本最古の歴史を誇る温泉として古くから人々の憩い場として親しまれ、温泉街もまた観光地となっている。

瀬戸内海に面する須磨・垂水は、海を楽しむことのできる海洋レクリエーション地域として、阪神間有数のヨットハーバーや海水浴場があり、水泳やヨット、ウィンドサーフィン等を楽しむことができる。

② 豊かな生活文化

1868年に神戸が開港され、居留地開設を契機に日本でも有数の国際都市として発展してきた。そのために現在でも神戸に異国情緒あふれるまちというイメージを

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

多くの方が持っている。

③ スポーツ先進都市

神戸港として開港されて以降、神戸には数多くのスポーツが外国から伝わり、ゴルフやサッカー、マラソン等の発祥の地として知られている。また初めてアメリカ・メジャーリーグのプロ野球チームが来日し、試合を行った(1908年)のも神戸であり、1927年には日本で初めてボクシングの公式戦が神戸で行われ、御影にボクシングジムもできた。

現在でも数多くのプロスポーツやトップレベルのクラブチームが神戸で活躍しており、神戸はスポーツ先進都市として日本を牽引している。

④ 神戸ならではの都市基盤・産業基盤

神戸は、海や山といった自然環境のみならず、造船・鉄鋼などの基幹産業に加えて、ファッション、コンペンション、マルチメディアなどの幅広い分野にわたって都市基盤の整備に努めてきており、健康・医療・福祉・スポーツ・余興などの新しい分野の成長・発展に必要な要素は整っている。

これらの他の大都市にはみられない「神戸の個性」を活かして神戸市の発展につなげていく必要がある。そして、アスリートタウン構想において、解決すべき課題として6つ挙げられている

- ① 新しいスポーツ文化の創出
- ② 積極的な健康づくりの推進
- ③ 多様なスポーツ環境の整備
- ④ 健康・スポーツに関する科学的な知識や技術の向上・普及
- ⑤ 地域コミュニティづくり
- ⑥ 人材の発掘・集積と経済の活性

① 新しいスポーツ文化の創出

社会の変化などにより近年、個人の価値観が量から質へ、モノの豊かさから心の豊かさへと移行するにつれて、スポーツそのものが本来備えている楽しさや喜び、創造性を享受するためにスポーツを行う人々が増えている。また、スポーツは、個人の自由な時間における自立的な葛生であり、自己実現を求める対象として、その意義が一層高まっている。

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

こうした流れの中、多様な種目や多様な関わり方(する・みる・ささえるなど)を通じて、多くの老若男女がスポーツを実践あるいは参加するようになり、スポーツが市民一人一人のライフスタイルあるいは地域コミュニティに大きな影響を及ぼしつつある。今後の都市政策においては、この新たなスポーツ文化をまちづくりの一つの核として創造し、育成することが求められている。

この点は、6頁の神戸市のスポーツ振興の取り組みでも触れている。

#### ② 積極的な健康づくりの推進

急速に少子化・超高齢化が進行する中、都市的な生活行動や食生活の変化などに起因する生活習慣病の蔓延などの影響で、健康教育や健康の保持・増進について関心を持つ人々が増えている。その結果、以前にも増して、自分の身体は自分でコントロールするという考えのもと、心身の健康を保持・増進する活動に積極的に参加していこうとする姿勢が、多くの人々の中に芽生えてきている。

このため、すべての市民が、家庭や地域において、家族や地域住民と触れ合いながら継続的に心身の健康づくり活動やスポーツなどを行える環境をつくることが求められている。

#### ③ 多様なスポーツ環境の整備

生活様式の変化や価値観の多様化に伴い、自由時間を利用したスポーツ活動や、スポーツ・運動を伴う健康づくり活動に参加する市民は年々増加している。神戸市民意識調査(平成9年度)でも、スポーツ観戦や自分でスポーツをするのが好きだとする市民の割合は8割を越える。また、スポーツなどを楽しみ人々の年齢層が広がっていることやスポーツ種目の多様化が進んでいることから、活動タイプの複合化や高度化が進んでいる。

このため、市民誰もが、それぞれの好みや技術レベルなどに応じて、日常的にスポーツや健康づくり活動に親しむことができるように、ニーズの多様性に対応した安全かつ快適なスポーツ環境の整備が求められている。

#### ④ 健康・スポーツに関する科学的な知識や技術の向上・普及

スポーツの現場においては、怪我や故障などを防止するために、正しい技術の指導や知識の習慣に力を入れるようになったが、依然としてスポーツ障害が数多く発生しており、その対策が急務となっている。これら健康づくりやスポーツの現場において多様化するニーズあるいは課題に対応するため、スポーツ医・科学の知識や専

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

門技術を集積し、健康・スポーツに関する科学的な知識や技術などにかんする研究・開発に取り組み、その成果を市民やトップアスリートへ提供していくことが求められている。

#### ⑤ 地域コミュニティづくり

日常的な生活の場である地域において、家族や近所の人たちとスポーツや健康づくりを楽しもうとする人たちが増えている。日常的な生活の場で、生活がともに健康づくりを行ったり、スポーツを楽しむことで住民間の交流が促進され、地域住民の連帯感も高まることにより、コミュニティが活性化することが期待される。このため、地域住民の交流が活発なコミュニティをつくるという観点からも、身近な地域の中でスポーツを楽しむ、健康づくりを楽しめる環境づくりが求められている。

#### ⑥ 人材の発掘・集積と経済の活性

健康・スポーツを中心とした各種事業を展開するためには、指導者や研究者、事業推進者、管理運営者、プランナー、そして政策担当者など、幅広い人材が様々な形で参画することが必要である。このため、神戸市民はもちろんのこと、地域外からも魅力ある人材を集め、活躍の場を提供する仕組みづくりが求められる。さらに、本格復興をめざす神戸においては、これらの人材や企業がもたらす技術やノウハウを活かして、既存産業の再建・高度化や健康・医療・福祉・スポーツ・余暇などの新規産業の育成、ならびに雇用の創出を図り、神戸経済を活性化させていくことが求められている。

「神戸の個性」である「スポーツ先進都市」の性格を活かしながら、アメリカンフットボールという球技を通して、神戸の地域活性化につなげることができれば、神戸アスリートタウン構想にもある、「新しいスポーツ文化の創出」「積極的な健康づくりの推進」「地域コミュニティづくり」「人材の発掘・集積と経済の活性」にもつながると考える。

### 5-2 神戸市におけるスポーツ振興成功例

神戸市におけるスポーツ振興の成功例として神戸マラソンとラグビーワールドカップ誘致を紹介する。

#### ① 神戸マラソン

神戸マラソンが開催される前までは、神戸市では神戸全日本女子ハーフマラソンを

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析 ～アメリカンフットボールを通じて～ 神戸大学経営学部 櫻井太貴

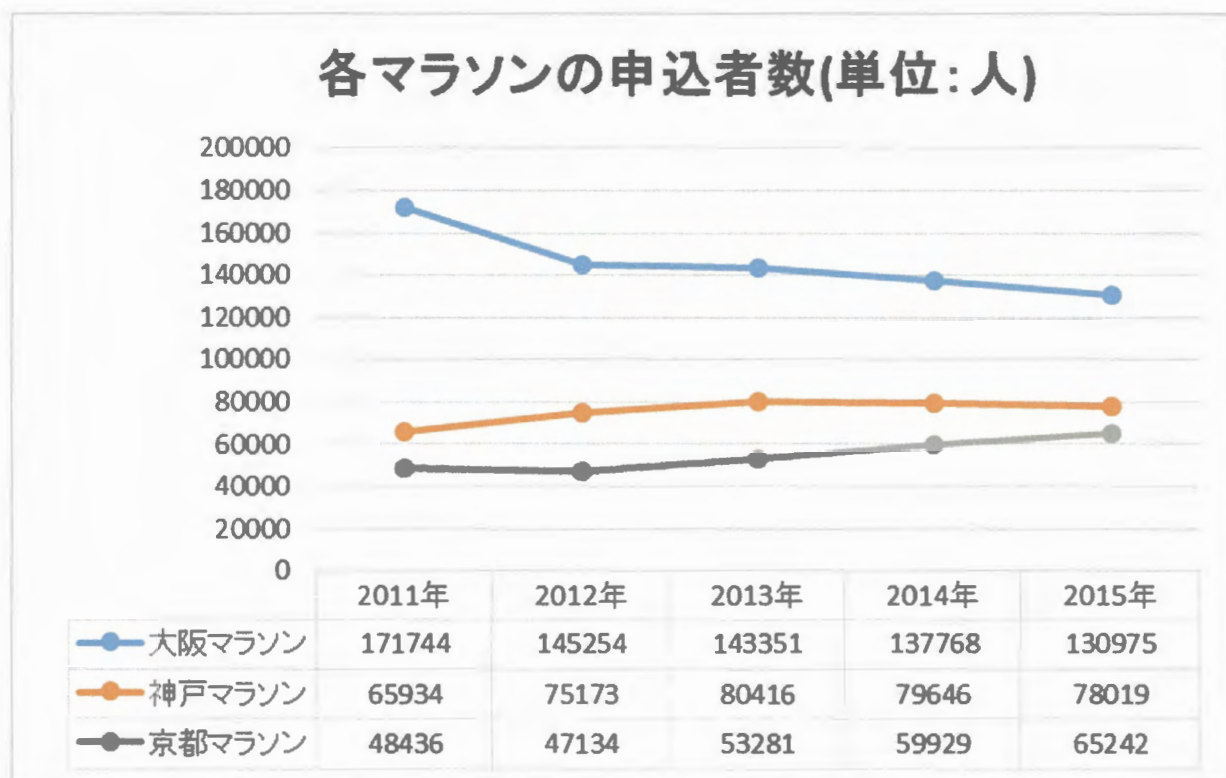
開催しており、トップランナーにとっては女子長距離の若手を育成する登竜門として、また、市民ランナーにとってはトップアスリートとともに市街地を走ることのできる市内唯一の大会として市民に支えられ、親しまれてきた。全国的な健康への関心が高まりを受け関東地方、東京においても皇居ランナーや東京マラソンなどランニングブームの中、2011年から市民参加型の神戸マラソンが開催されている。マラソンでは、「する」「みる」「ささえる」の3つすべてを兼ね備え、マラソンをただ「する」だけではなく、市民のボランティアが大会運営に参加し、沿道の応援も含めて、「みる」「ささえる」大会となっている。

マラソンのコースも沿岸を中心に、「神戸の個性」を含めて、神戸の魅力が十分に伝わるよう配慮がなされている。



また、申込者数も推移をまとめると次頁の図のようになる。

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
 ～アメリカンフットボールを通じて～  
 神戸大学経営学部 櫻井太貴



東京マラソン以降、関西でも神戸マラソン以外にも大阪マラソンや京都マラソンが開催され、都市型のフルマラソン大会が増えた。そのため、大会申込者数は神戸マラソンにおいては横ばいとなっている。しかし、大阪マラソンと同日開催となった年でも申込者数を減らすことなくできたことは特筆すべき点である。申込者数は2015年の第5回大会でも1日で定員を突破するなど人気は衰えていない。

神戸マラソン実行委員会によると、2014年の第4回大会における経済波及効果は過去最高の131億円(前回比8億円増)だった。

「する」「みる」「ささえる」スポーツという点でも、経済の活性という点でも総じて神戸マラソン開催による神戸市の地域活性化は成功といえる。これからの課題としては、この人気の維持とさらなる発展にあると考える。

② 2019年ラグビーワールドカップ誘致

ラグビーワールドカップは、4年に1度解されるスポーツイベントで、オリンピック、FIFAサッカーワールドカップに次ぐ世界三大スポーツイベントといわれている。2009年に2019年大会を日本で開催されることが決定された。

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

2015年3月2日にアイルランドのダブリンでラグビーワールドカップリミテッドの理事会が開催され、神戸市を含む12都市(北海道・札幌市、岩手県・釜石市、埼玉県・熊谷市、東京都、神奈川県・横浜市、静岡県、愛知県・豊田市、大阪府・東大阪市、福岡県・福岡市、熊本県・熊本市、大分県)が開催都市に選ばれた。

2019年日本大会はアジア初のワールドカップ、ラグビー伝統国以外での初めてのワールドカップ、ラグビー7人制がオリンピック種目に採用されてから初めての大会となっており、注目が高まっている。

当初は、日本大会の開催は国内のラグビーの人気などで不安視されていたが、日本でのラグビー人気転機となったのは2015年大会イングランド大会での日本代表チームの活躍である。ラグビー日本代表は第1回大会から8大会連続出場とワールドカップの常連国となっていたものの、ワールドカップ通算成績は1勝21敗2分け(第8回大会まで)となっており、第2回大会にジンバブエに52-8で大勝したのが唯一の白星となっていた。しかし、グループ予選で、当時、世界ランキング3位の南アフリカを34-32で劇的勝利を挙げ、続くスコットランドには敗戦したものの、サモア、アメリカを破り、3勝を挙げた。3勝したチームが決勝トーナメントに上がれなかったことは史上初めての出来事であった。2015年の日本スポーツ界を激震させたといっても過言ではない日本代表の活躍であり、人気を裏付けるように五郎丸歩選手の「五郎丸ポーズ」は、大人から子どもまで真似する人が続出し、流行語大賞トップ10にも選ばれた。

このラグビーフィーバーともとれる日本での人気ぶりは、2019年日本大会の不安を払拭した。EY総合研究所によると2019年日本大会における経済効果は直接効果、間接効果、波及効果を含めて、4200億円と試算された。ラグビーワールドカップの開催都市である神戸のまちにもたらされる経済効果は計り知れない。ラグビーワールドカップ招致ということに関しては、開催都市に選ばれた時点で成功といえる。しかし、真の成功とは、2019年大会を成功させることが必要であり、今後の課題であるといえる。

### 5-3 王子プロジェクト

現在、神戸市のアメリカンフットボールの振興に関しては王子プロジェクトと呼ばれるものが存在する。

王子プロジェクトとは、王子スタジアムに隣接する水道筋商店街とアメリカンフットボ

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

ールをつなぐプロジェクトである。2002年にアメリカンフットボールの試合会場として使用されていた阪急西宮スタジアム(西宮球戯場)が閉鎖されたのを受けて、アメリカンフットボールの試合を誘致するため、王子スタジアムを改修し、アメリカンフットボールの拠点(キックポイント)が王子スタジアムへと移った。王子スタジアム周辺の地域住民にアメリカンフットボールへの理解を深めてもらうことと同時に、アメリカンフットボールの選手や関係者、試合を観に来る観客などが周辺施設や商店街を利用することで地域活性化を図るプロジェクトである。

#### 6 アメリカンフットボールから地域活性化

前述の通り、神戸市はアメリカンフットボールの振興に力を入れてきた。野球やサッカーなどと比べてまだまだマイナースポーツといわれているアメリカンフットボールに力を入れているからこそ、さらなる振興・発展に力を入れ、地域活性化につなげていくべきであると考えられる。

##### 6-1 アメリカンフットボールでの地域活性化の先駆け(川崎市)

アメリカンフットボールを通じて地域活性化に取り組んでいる都市がある。それは神奈川県川崎市である。

ラグビーワールドカップに比べ、認知度も低いアメリカンフットボールにもワールドカップがあり、2007年に第3回アメリカンフットボールワールドカップは川崎で行われた。この大会を契機に、競技団体・地域・市民と連携しながら地域活性化の取り組みや青少年の健全育成の推進など、アメリカンフットボールを活用したまちづくりを進めるとともに、川崎がアメリカンフットボールの拠点にするために取り組みも進められている。その取り組みとして4点挙げられる。

##### ① アメリカンフットボールの拠点化の推進

取り組みの指針として、川崎がアメリカンフットボールにとって特別なまちであることを広く認識してもらうことを目標としている。川崎市にある富士通スタジアム川崎では毎年、数多くのアメリカンフットボールの試合が行われ、大学や社会人の試合のみならず、指導者講習会なども開催されている。

2005年より川崎市市内での小中学校でのフラッグフットボール(アメリカンフットボールをより簡単で安全にしたスポーツ)の教育普及に取り組み、2008年には、私立小学校115校のうち、約半数にあたる57校で授業に採用するなど、中高も含めて、急速に普及されてきた。(日本フラッグフットボール協会HPより)



## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

このように川崎では、多くの子どもたちがフラッグフットボール・アメリカンフットボールに取り組み、そして市民の間でもアメリカンフットボールが広く認知されている。

#### ② アメリカンフットボールを活用した地域商業・経済の活性化

アメリカンフットボールの試合の観戦者が地元商店等に流れるしくみをつくり、競技関係者と商店街が、広報・PR、イベント運営などさまざまな面で連携し、競技としてのアメリカンフットボールの魅力の発信や発展の商業・経済の活性化につなげる取り組みをしている。

これまでの取り組みとしては、アメリカンフットボールと川崎駅周辺の商店街がタイアップをした。川崎駅周辺の商店街の振興を目的として、川崎市と川崎商工会議所が共同で「アメフット×商店街マル得マップ」を作成し、試合当日の来場者や川崎駅周辺の商店街、大型店等で配布し、協力した店舗を選手たちが訪問したりしている。また地域商店街のイベントに選手やチアリーダーが組織的に参加し、継続的な関係を築いている地域もある。商店街のイベントだけではなく、赤い羽根共同募金等の募金活動にも積極的に参加している。

#### ③ アメリカンフットボールと川崎の魅力発信・相互イメージアップ

アメリカンフットボールを川崎の新たな魅力のひとつとして育て、内外に広く発信することにより、アメリカンフットボールと川崎市の相互イメージアップを図っている。

社会人リーグのXリーグ及び関東学生リーグ戦の市内用広報物として「川崎はアメフットが熱い！！」と書かれたポスターが市内各所に提示され、川崎=アメリカンフットボールというイメージが強く思われるデザインとした。市営バスの中釣り、市役所前等の大通りや商店街街灯へのタペストリーの展示など、行政が協力した多様な広報展開も積極的に行われている。

関西学生リーグのポスターに川崎市の取り組みのように神戸の文字が大きく出るというわけではないので、神戸=アメリカンフットボールというイメージを連想させるためにもそのような取り組みは有効であると考えられる。

#### ④ フラッグフットボールを通じた子どもたちの健全育成・市民の絆強化

フラッグフットボールを通じた市民の交流を促進し、多様な市民のつながりの強化、地域コミュニティの活性化を図っている。この取り組みは前述のアメリカンフッ

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

トボールの拠点化の推進とつながってくる。

#### 6-1-1 フラッグフットボールの利点

学校教育の場で、フラッグフットボールを用いる利点は一体何だろうか。他のスポーツでもいいのではないかという意見もあるだろうが、フラッグフットボールにはさまざまな利点ある。

フラッグフットボールはアメリカンフットボールと同様に決まった攻撃回数の中で陣地を進めていき、得点(タッチダウン)を競う球技である。腰につけたフラッグを取ることをタックルの代わりにすることで、安全にプレーでき、防具も身に着けない。そのため、性別・年齢問わずだれでもフラッグフットボールをすることができる。

選手は全員に明確な役割があり、プレー毎に区切られ、ハドルという作戦会議を行い、常に考えながらプレーし、チームスポーツの醍醐味であるみんなで協力することを学ぶ。そして、スポーツが苦手でもチームにしっかりと貢献することができる。たとえボールを持っていない選手も重要な役割を持っている。

成長期を迎えている小学生の年代は、同じ学年だとしても体格や運動能力に個人差が生じてしまう。そのため、スポーツ本来の面白さや魅力を得られないまま、やる気も無くしてしまい、さぼってしまう子も出てきてしまう。しかし、フラッグフットボールでは、体格の大きさや足の速さ関係ない。フラッグフットボールには、多様なポジションがあり、個性が十分に活かすことができる。攻撃回数が複数あるために、最初のプレーが進まなかったとしても次のプレーを頑張ろうとするチャレンジ精神も養われる。

フラッグフットボールは学校教育の場で非常に優れている。

#### 6-2 アメリカンフットボールの魅力

アメリカンフットボールには、フラッグフットボール以上に魅力がある。ただぶつかり合うだけの野蛮なスポーツというイメージを持っている人も多いかもしれないが現実には全く違う。

アメリカンフットボールは、タックルやブロックなど激しいスポーツであることは間違いないが、華麗なパスキャッチや独走タッチダウンなど華やかさも持ち合わせている。そして、それらのプレーの裏には、さまざまな駆け引きがあり、知力もなければならない。ただ強いだけでは勝つことはできない。ハーバード大学をはじめ、世界有数の大学のアメリカンフットボール部が活躍していることも証明している。体力だけではなく、知力

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析 ～アメリカンフットボールを通じて～ 神戸大学経営学部 櫻井太貴

も兼ね備えた究極のスポーツこそが、アメリカンフットボールである。

そして、選手たちは個々の特徴や一つでも秀でたことを活かして、プレーすることもできる。

アメリカンフットボールは、激しさ、華やかさ、戦略、技術すべてを兼ね備えている。

### 6-2-1 アメリカンフットボールの難しさ

アメリカンフットボールを理解するときに難しくしているのは、やはりルールの複雑さにある。野球やサッカーと比較すると初心者はその難しさに戸惑ってしまうだろう。

しかし、ルールは実に明確でシステマティックなものとなっており、知れば知るほど熱中していくことは間違いない。

ラグビーと似ているとよく揶揄されるが全く別のスポーツである。基本的に攻撃と守備がはっきり分かれており、攻撃は4回の攻撃回数の中で10ヤード進むことができれば、もう一度4回の攻撃回数が与えられ、最終的にエンドゾーンと呼ばれるフィールドの端までボールを持ち込めば得点となる。1～4回目のどの攻撃で10ヤード進むことができればもう一度1回目の攻撃になるということである。守備は、4回攻撃される中で10ヤード以内の前身に抑えればいいのだ。

初心者は、ルールを熟知しアメリカンフットボールをよく理解している人に解説してもらいながら観戦すればより理解できる。

### 6-3 日本でのアメフトの歴史

日本では、岡部平太氏が1917年にシカゴ大学で学んだ後、1920年に帰国後アメリカンフットボールを普及していった。そして、日系2世が中心となって、立教大学・明治大学・早稲田大学が東京学生米式蹴球競技連盟を設立して今に至る。

現在では、小学校・中学校・高等学校・大学・社会人すべての世代にリーグがあり、毎年しのぎを削っている。競技人口は全国で2万人程度ではあるが、毎年徐々に増加している。

### 6-4 日本でのアメフト人気

#### NFLとNCAA

日本でアメリカンフットボールのブームが起こったのは1970年代にさかのぼる。1975年にNFLが日本に初上陸してからである。1980年代には、サンフランシスコ・49ersのエースクォーターバック(QB)、ジョー・モンタナが一躍大人気となった。スーパーボウル4戦全勝し、うち3回でMVPを獲得するなど史上最高のQBと

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

称され、「モンタナマジック」と呼ばれる数々の華麗な逆転劇は多くの人々を魅了した。特に1989年の第23回大会の「ザ・ドライブ」と呼ばれる逆転劇はスーパーボウル史上の伝説となっている。そんなジョー・モンタナが、1989年のプレシーズンの試合を日本で行った際来日し、日本でのアメリカンフットボール熱は最高潮のものとなった。1990年代初頭には、三菱電機のCMにも登場した。

また、当時はNCAAの公認試合が年間2試合行われていた。「パイオニアボウル」である。出場校は、グランプリング大にはじまり、ノートルダム大、UCLA、陸軍・空軍士官学校等、強豪大学が来日し試合を行っていた。もう1試合は1月に行われていた全米オールスター線「ジャパン・ボウル」である。

#### テレビ番組

テレビ番組では、NFLの試合が毎週2番組放送されており、プロだけではなく、アメリカのカレッジフットボールの試合も放送されていた。チャンピオンシップゲームの1つであるローズ・ボウルも放送され、UCLAの公式戦を全試合放送した年もあった。

#### 日本の大学のアメリカンフットボール

日本の大学リーグでもアメリカンフットボールブームは勢いを増した。1970年代から80年代にかけては、関西学院大学と日本大学が圧倒的な強さを誇っており、甲子園ボウル(東西大学王座決定戦)は、赤と青の戦いと呼ばれ、日本一を争っていた。そこに割って入っていったのが、日本でトップレベルの学力を誇る京都大学である。1976年のリーグ戦で初めて関西学院大学を破り、関西学院大学の関西リーグ戦連勝記録を145でストップさせたのを皮切りに、1982年には悲願の関西制覇を成し遂げ、翌年も優勝し連覇を果たした。そして、1983年の甲子園ボウルで日本大学を撃破し、初の大学日本一に輝いた。その勢いそのまま日本選手権のライスボウルで社会人王者のレウナンを破り初代日本一となった。その後も、関西学院大学と京都大学の激戦は続き、両校のライバル関係は関西でのアメリカンフットボール人気を爆発させた。関東では早慶戦等が大学スポーツの象徴であるように、関西では、関京戦が大学スポーツの象徴となった。

#### マンガ・アニメ

2000年代に入ると新たなステージに突入した。2002年に週刊少年ジャンプで「アイシールド21」の連載が始まった。そして、2005年からアニメがテレビ放送され、さらに人気を増した。アメリカンフットボールを題材にしたマンガを少年週刊誌

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

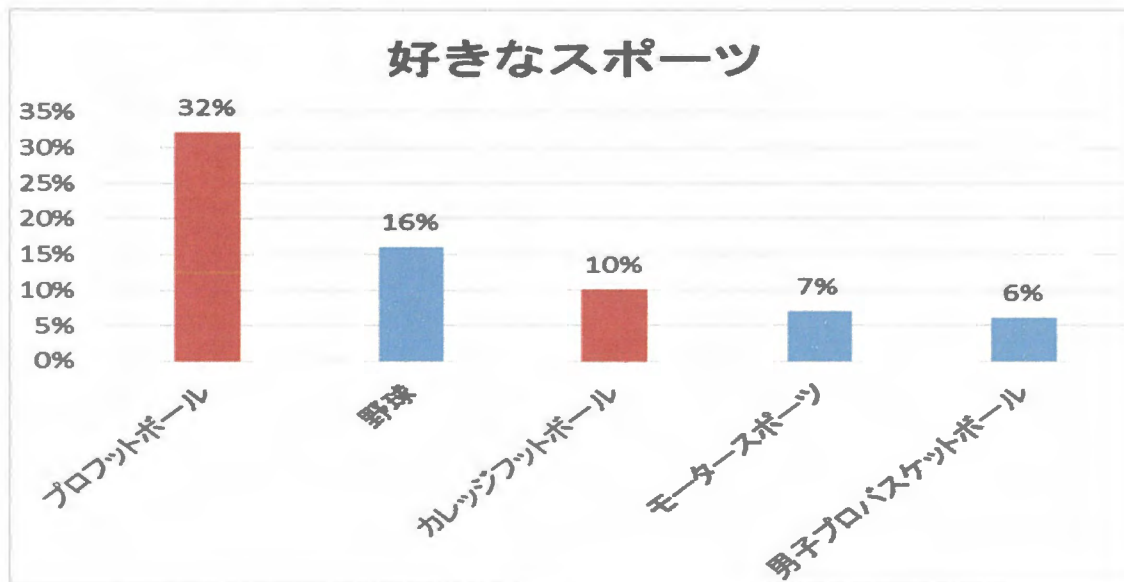
### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

で連載、アニメ放送によって、アメリカンフットボールに馴染みのない子どもたち、1970年代からのアメリカンフットボールブームを知らない世代にも幅広くアメリカンフットボールを認知してもらうきっかけになり、アメリカンフットボールブームを再燃させたのは間違いない。

#### 6-5 アメリカの大学スポーツの実態

アメリカには巨大なスポーツビジネスの市場が存在している。アメリカ4大スポーツといえば、NFL(アメリカンフットボール)、MLB(野球)、NBA(バスケットボール)、NHL(アイスホッケー)であるが、この中でもアメリカンフットボールが圧倒的な人気を誇っている。アメリカ大手世論調査会社ハリス・インタラクティブの2014年の調査によると、「最も好きなスポーツは何」という問いに対する回答で、トップはプロアメリカンフットボール・NFLで32%であり、2位に野球、3位にカレッジフットボールが続いており、アメリカンフットボールというくくりでみると、実に42%という結果である。この調査は1985年から開始されており、1985年時点ではプロアメリカンフットボール(24%)と野球(23%)の差はごくわずかであったが、それ以降はその差は広がる傾向にある。



ハリス・インタラクティブ調べ(2014年)

カレッジフットボールも人気高く、大学生を中心に若年層やハーバード大学など名門大学もリーグ戦に参加しており、高学歴層の関心も高い。

大学スポーツにおいてアメリカと日本の最も大きな違いは、大学スポーツが生み出す収益である。アメリカではプロチームと同等かそれ以上に稼ぎを記録しているのが大学ス

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

スポーツである。強豪校なら1校で年間100億円以上の収益をあげている大学もある。最も稼いだ大学はテキサス大学で、165億円にもものぼっている。そして、南部の強豪校として知られているアラバマ大も140億円を稼いでいる。NHLのチームでこの140億円という年間収益を超えたチームは存在していない。

日本のプロサッカーチームと比較しても2015年に年間王者に輝いた、サンフレッチェ広島でさえ、2014年の収支は約31億円で留まっている。最も収益をあげた浦和レッズでさえ、2014年の収支は約58億円である。ヴィッセル神戸は2013年は約20億円である。

このようにアメリカの1大学にすら日本のトップチームは収益で敵わない結果であり、いかにアメリカの大学スポーツ市場の大きいかがえる。

さらに、アメリカの大学の多くはキャンパスの近くに自大学のスタジアムを所有している。アラバマ大学は、観客席数は約10万2000席もあり、アラバマ大の試合になるとこの観客席はいっぱいになる。チケット収益だけでなく、グッズ販売やテレビの放映権料なども加え相当な金額となる。地元大学のホームゲームによって、かなりの経済効果が地元地域にもたらされる。確実に地域活性化につながっているといえる。

一方で、日本では、大学スポーツがアメリカのように大規模に商業化しているわけではない。日本の大学スポーツでここまで成功している大学はない。

#### 6-6 神戸大学アメリカンフットボール部の取り組み

実際にスポーツ振興を通じて地域活性化に貢献し、アメリカンフットボールの普及活動にも取り組んでいる神戸大学体育会アメリカンフットボール部の主たる活動は、小学校のフラッグフットボールの授業の参加、先生向けのフラッグフットボール教室、フラッグフットボール大会の開催、地域イベントに参加等がある。

##### 小学校のフラッグフットボールの授業の参加

選手たちが、実際に近隣小学校(鶴甲小学校、高羽小学校、六甲小学校)に出向いて、フラッグフットボールの授業に参加するというものである。授業を通してフラッグフットボールの楽しさを子どもたちに伝え、人間的にも成長できるよう授業の補助をしている。この活動は実を結んでおり、子どもたちが神戸大学アメリカンフットボール部の試合にも来てくれたりした。

##### 先生向けのフラッグフットボール教室

どれだけフラッグフットボールが教育に適していたとしても、実際に授業に取り入れる

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

かどうかは先生次第であり、先生がかつてしていたスポーツをそのまま授業に取り入れ  
たりするため、神戸大学アメリカンフットボール部では、先生向けのフラッグフットボ  
ール教室を開催している。

#### フラッグフットボール大会の開催

フラッグフットボールを教えるだけではなく、神戸大学アメリカンフットボール部主催  
でフラッグフットボールの大会を開催し、2015年に第1回大会が開催された。

#### 地域イベントに参加

王子プロジェクトで前述の水道筋商店街の餅つき大会にも参加している。

これらの活動を通して、アメリカンフットボール・フラッグフットボールの普及をし、  
また、地元住民の理解・協力を求めている。地域貢献活動であり、微力ながら地域活性  
化に努めている。

## 7 神戸市の地域活性化案

神戸アスリートタウン構想の課題に沿って、神戸市の地域活性化案を提示していく。

### 7-1 アメリカンフットボールを通じて

#### NFLのプレシーズンもしくはシーズンの試合招致

かつて日本ではNFLのプレシーズンの試合が行われていた。他国でアメリカンフット  
ボールを促進するため、また、日本でのアメリカンフットボールブームを受けて、19  
86年より「アメリカンボウル」が開催され、2005年までに13回(東京12回、  
大阪1回)開催されている。

ロンドンでは、2007年よりシーズンゲームを開催しており、サッカーの聖地でも名  
高いウェンブリー・スタジアムで行われる。サッカー発祥の地で知られるイギリスだが、  
アメリカンフットボールの人気も高い。スタジアムには8万人以上の観客が詰めかける。  
このような試合を神戸で開催しようという提案である。しかし、神戸開催するにはさま  
ざまな問題が存在する。

まず、競技場の問題である。王子プロジェクトにより、王子スタジアムをアメリカンフ  
ットボールの拠点としてもものの、観客収容人数は3000人程度で少なすぎる。そこで  
ラグビーワールドカップで使用される予定の神戸市御崎公園球戯場・ノエビアスタジア  
ムを使用する。収容人数は30132人と東京ドーム(約5万人)より少ないものの、東

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

京ドームは野球場であるのに対し、ノエビアスタジアムは国際級球技専用スタジアムとなっており、観客席とフィールドが非常に近いのが特徴である。アメリカンフットボールの激しさをより近くで感じることができる。

そして、何よりスポーツ先進都市として、ラグビーワールドカップ招致に成功し、神戸市としても何か新しいことにチャレンジしようとしている。そのうえで、このNFL招致には積極的になってほしい。

招致を成功させるには、ラグビーワールドカップの日本招致の際にも問題となった、対象スポーツの人気度である。日本において、アメリカンフットボールはマイナースポーツであり、いかにアメリカンフットボールを普及させていくかが問題である。神戸にNFLを招致するためには、神戸が日本で最もアメリカンフットボールに熱いまちにならなければならないと考える。そのためには神戸のアメリカンフットボールのチームの活躍がカギになる。この案は数年以内の話ではないが、10年20年先を見て、NFL招致に成功し、神戸＝アメリカンフットボールとなれば、神戸アスリートタウン構想の新しいスポーツ文化の創出、地域コミュニティづくり、経済の活性につながるはずである。

#### 7-2 スポーツ科学センターの設立

2つ目の提案は、7-1でカバーしきれなかった神戸アスリートタウン構想の積極的な健康づくりの推進、多様なスポーツ環境の整備、健康・スポーツに関する科学的な知識や技術の向上・普及、地域コミュニティづくりをカバーする提案である。

それはスポーツの分野に関する研究施設、**スポーツ科学センター**である。この分野の研究は、大学や企業が独自に行われているのが現状で、この研究施設を作ることによって、バラバラで行っている研究を同じ場所で同時に一括して行うことで研究の効率を上げることができるはずである。

日本には東京に国立スポーツ科学センターがあり、スポーツ科学・医学・情報研究推進の中核機関とされている。下図のように、国立スポーツ科学センターはさまざまな活動を行っている。スポーツ医・科学支援事業では、トップレベル競技者の競技力を評価・診断して、競技力の向上に役立つデータやアドバイスを提供することを目的としている。スポーツ医・科学研究事業では、各競技種目特有の課題や問題点を抽出し、競技力向上に直接的かつ即時的に貢献する研究を行っている。スポーツ診療事業では、トップレベル競技者のスポーツ外傷・障害及び疾病に対する診療、アスレティック・リハビリテー



## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

ション、心理カウンセリング、栄養相談を行っている。充実した内容であるが、関西に住む我々がこの施設を利用することはほばないだろう。そこで、神戸市に国立スポーツ科学センターなる施設を作り、スポーツ科学研究の関西の拠点にしようというのが私の提案である。新たな施設では、対象者をトップレベル競技者に限定するのではなく、アマチュア競技者まで広げ、トップレベルのスポーツ選手だけではなく、誰でも施設を利用でき、幅広く研究がなされることを期待している。



新たな研究施設では、スポーツ選手の更なるトレーニングと一般市民の健康を目指し、スポーツ選手に対する運動の研究やお年寄り向けのリハビリ指導などを行い、それと同時にスポーツ栄養学においてスポーツ選手の栄養補給や食事法研究も行う。スポーツ栄養学とは、スポーツ選手が試合で最大限能力を発揮し、ケガを予防して質の高いトレーニングを実施し、競技を長く続けられるようにするための食事法の研究で、食事もトレーニングの一部という考えで行われている。一般人の食事法とは異なっているものの、好き嫌いなく、バランスよく食べるという食教育を幼少期から徹底させることによって、生涯を健康に暮らすことに役立つはずである。

これらの研究では神戸大学医学部や発達科学部と共同研究することも可能であると考えられる。また、大規模な研究施設を作ることによって、スポーツ科学の分野では、スポーツ用品メーカーが、スポーツ栄養学の分野では、食品メーカーや製薬会社が研究・参入することも可能だろう。

関西にスポーツ科学研究の拠点を作るという計画が大阪府箕面市で挙がっている。北大阪急行の北への延伸で同市の船場地区に建設される予定の新駅「箕面船場駅」前の再開発エリアに、大阪大学と協力して「関西スポーツ科学・ヘルスケア総合センター(仮称)」

## スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析

### ～アメリカンフットボールを通じて～

神戸大学経営学部 櫻井太貴

を整備するという計画である。この計画の前には、国立循環器病研究センター(吹田市)の移転先候補地として誘致を進めてきたが、昨年6月に吹田市の吹田操車場跡地に移転することが決まり断念したという経緯がある。

しかし、私は箕面市に施設を作るよりも神戸市に施設を作ったほうが良いと考えている。神戸市は、神戸医療産業都市構想をもとにポートアイランド第2期を中心に高度医療技術の研究・開発拠点を整備し、医療関連産業の集積を図ってきた。中核施設である「先端医療センター」「神戸臨床研究情報センター」「理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター」など11施設が稼働している。これらを中心に医療機器、医薬品、再生医療等130を超える医療関連企業が集積している。その目的は、「神戸経済の活性化」「市民の健康・福祉の向上」「国際社会への貢献」が挙げられており、より健やかで活力ある神戸にしていくためのプロジェクトである。今回の提案はこの構想にも一致している。さらに、1998年にプロジェクトを立ち上げてからの長年の医療産業都市としての知識やノウハウは、箕面市より格段に持っているはずである。また、都市としての大きさに関して、人口が箕面市の13万人に対して、神戸市は10倍以上の150万人となっており、研究成果をより多くの人に還元することができる。

この2つの地域活性化案を用いることにより、神戸アスリートタウン構想に挙げられているすべての課題に取り組み解決することができる。

## 8 結論

これまでの調査で、神戸というまちは日本屈指の大都市であるけれども、スポーツの分野に限った問題でも数多く存在していることがわかった。神戸は福岡市にも人口を抜かれ、神戸港のクルーズ船の入港数も博多港や長崎港にも抜かれることは確実で、さまざまな問題を抱えている。しかし、1スポーツのアメリカンフットボールを通じて、「神戸の個性」を十分に活かしながら多くの課題に向き合っていくことは非常に価値があると考えられる。また、神戸にはこれらの課題を解決する力は十分に備わっている。ラグビーワールドカップ誘致成功を機に神戸こそがスポーツタウンと認知されるためにもスポーツの分野から地域活性化につなげ、多くの地方自治体の前例となる取り組みをしていくべきである。

スポーツ分野に関する地域活性化と神戸市のスポーツ振興に関する分析  
～アメリカンフットボールを通じて～  
神戸大学経営学部 櫻井太貴

参考資料

- ・平成22年度文部科学白書
- ・平成23年度文部科学白書
- ・文部科学省ウェブサイト [www.mext.g.jp](http://www.mext.g.jp)
- ・横浜市ウェブサイト [www.city.yokohama.lg.jp](http://www.city.yokohama.lg.jp)
- ・カマタマーレ讃岐オフィシャルサイト [www.kamatamare.jp](http://www.kamatamare.jp)
- ・フラッグフットボールの体育授業満足度と運動参加意図に関する研究  
飯塚啓太(早稲田大学)
- ・神戸市ウェブサイト [www.city.kobe.lg.jp/](http://www.city.kobe.lg.jp/)
- ・第5回神戸マラソン公式サイト <http://obe-marathon.net/2015>
- ・箕面市ウェブサイト <http://www.city.minoh.lg.jp/index.html>
- ・LEGENDS RUGBY ウェブサイト <http://www.legendrugby.jp/>
- ・国立スポーツセンターウェブサイト <http://www.jpnsport.go.jp/jiss/>